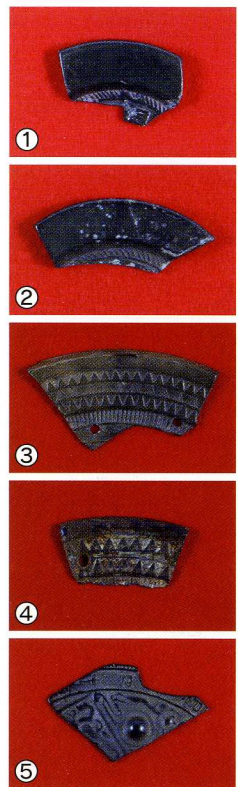


「大分市内出土 青銅破鏡」
～大分市指定有形文化財～

平成21年12月16日、「大分市内出土青銅破鏡」が大分市の有形文化財に指定されました。市内出土の青銅破鏡は6遺跡8例あり、すべて中国で製作された漢鏡です。弥生時代の青銅鏡は、主に福岡平野を中心とした北部九州で見つかり、これらの地域では多くが



復元品展示風景

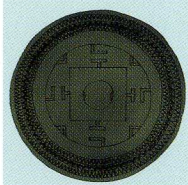
お墓の副葬品として完全な形で出土します。しかし、大分をはじめ周辺地域では、弥生時代後期～終末期に完全な形の鏡を意図的に分割した「破鏡」として、住居に捨てられた状態で出土する場合があります。今回指定された青銅破鏡も8例中6例が住居に捨てられた状態で見つかったものです。残る2例は弥生時代の遺構から出土したものではありませんが、周辺に弥生時代後期の遺構群が見つかり、ほぼ同類のものと考えられます。これらの破鏡は、表面や割れた部分をよく研いた痕が確認でき、中には、小さな穴をあけ、ペンダントのように利用されていた物もあるなど、破鏡という形でかなりの長期にわたって伝世していたことがわかります。破鏡とはいえこれらは、一般的には入手しにくい特殊な貴重品で、これを保有できる者は限定された階層の人とみることができ、破鏡は有力者が権力の象徴である鏡を割り、周辺地域へ配ることで権威を誇示したとも言われており、北部九州との強いつながりを示しています。これらが弥生時代後期の後半から終末に一樣に捨てられている状況は、北部九州地域の勢力の衰退と深い関わりがあると考えられています。破片ではありますが、弥生時代の文化や社会を考える上で極めて重要な資料といえます。現在、①～⑤の資料については、常設展示「弥生のコーナー」にて常時展示していますので、この小さな破片に映し出される弥生の世界を感じていただければと思います。

名称	遺跡	遺構
① 昭明鏡	守岡遺跡	住居跡
② 昭明鏡	地藏原遺跡	住居跡
③ 方格規矩鏡	尼ヶ城遺跡	住居跡
④ 方格規矩鏡	大道遺跡群	検出時
⑤ 獣帯鏡	守岡遺跡	住居跡
⑥ 方格規矩鏡	東大道遺跡	近世水田
⑦ 方格規矩鏡	雄城台遺跡	住居跡
⑧ 雲雷文内行花文鏡	雄城台遺跡	住居跡

大分市内出土青銅破鏡リスト

漢鏡の種類

漢鏡は中国の漢の時代(BC206年～AD220年)につくられた鏡の総称です。漢は、AD8～24年の新を挟んで前漢と後漢に分かれますが、鏡もそれに合わせて、前漢時代に作られたものを「前漢鏡」、新と後漢の時代に作られたものを「後漢鏡」と呼んでいます。これらの漢鏡のさらに細かい区分は、模様の種類や、銘に含まれる特徴的な文字(熟語)に注目して分けたりと様々です。例えば、前漢鏡として知られる「昭明鏡」は、「内清之以昭明光而…」のような銘文から名付けられたものです。また、後漢鏡の代表でもある「方格規矩鏡」は、中央に正方形の区画(方格)と、定規(規)のような「T」と「L」字形、コンパス(矩)のような「V」字形を並べることから名付けられたものです。小さな破片でもこうした特徴から全体の形がわかります。



方格規矩鏡イメージ図

利用案内

- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日(祝日の場合は開館、但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日)
- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円)
- 交通機関 JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分
- 開館時間 9時から17時(入館は16時30分まで)
- 休館日 月曜日(祝日の場合は開館、但し第1月曜日は開館し、翌火曜日が休館日)
- 観覧料 大人200円(団体150円) 高校生100円(団体50円)
- 交通機関 JR久大本線 豊後国分駅下車 徒歩2分
- 大分バス[国分新町ゆき] 歴史資料館入口下車 徒歩5分
- 大分自動車道 大分IC・光吉ICよりとも約15分

発行日：平成22年2月13日

発行：大分市歴史資料館 〒870-0864 大分市大字国分960-1 TEL.097-549-0880

※ホームページ <http://www.city.oita.oita.jp/>(大分市ホームページ)の「施設ガイド」も併せてご覧下さい。

テーマ展解説講座

- 内容 講座室でテーマ展「大友館 最前線！」について、スライドなどで解説します。
- 日時 2月28日(日) 14時～15時30分
- 講師 大分市教育委員会 文化財課職員
- 参加費 講座は無料です。
※展示をご覧になる場合は観覧料が必要です。

ミュージアム・シアター

- 実施日 2月28日(日) ●今よみがえる大友の息吹 ◎まんが日本昔ばなし 「わらしべ長者」「田植地蔵」
- 3月28日(日) ●信長・秀吉・家康 ◎まんが日本昔ばなし 「浦島太郎」「絵姿女房」
- 時間 13時～14時
- 料金 無料 ※事前の申し込みは必要ありません。

ふれあい歴史体験講座

- 定員 各回70名(先着順)
- 時間 午前の部 9時30分～(約2時間)
- 午後の部 14時00分～(約2時間)

実施日	内容	時間	材料費	受付開始日
2月27日(土)	土笛作り	午前・午後	50円	受付中
3月13日(土)	火起こし	午前のみ	無料	2月20日(土)
3月27日(土)	勾玉作り	午前・午後	200円	3月6日(土)

■応募 上記の受付開始日より、電話にて応募ください。
(大分市歴史資料館：097-549-0880)

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol. 90
2010.2.13

大分市歴史資料館 テーマ展示Ⅳ

大友館 最前線!

—考古資料と文献史料が語る大友館の実像—

2月13日(土)～3月28日(日)



発掘調査が進む大友館跡全景(2008年8月6日撮影)

大友館 最前線!

—考古資料と文献史料が語る大友館の実像—
会期:2月13日(土)～3月28日(日)

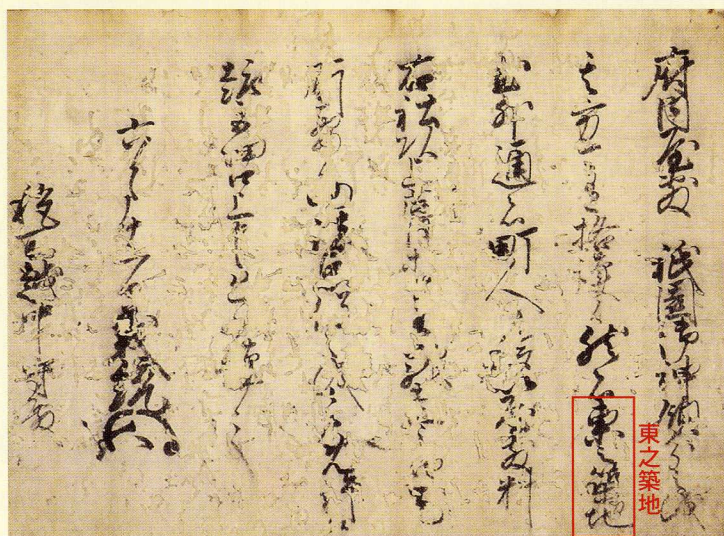
豊後国の守護、大友氏の本拠地であった「府内」(現在の大分市)は、戦国時代の町の様子が描かれた古い絵図「府内古図」などを手がかりに現在発掘調査が重ねられ、戦国都市「府内」の姿が日々明らかになっています。中でも、町の中心にあった「大友館」は、長年にわたる遺構・遺物などの調査・研究や文献史料の検討から、具体的な様子がわかってきました。本テーマ展示では、最盛期の館の様子や、館で執り行われた儀式の内容など、最新の大友館研究の成果を紹介します。

館のはじまり

大友氏は21代大友義鎮(宗麟)とその息子の義統の時代にもっとも繁栄しました。顕徳町3丁目で発見された大友館は、宗麟が義統に家督を譲る際に建設したもので、大友氏最盛期の館といえます。館からは、儀式や饗宴で使われた素焼きの器「かわらけ」が多量に見つかっています。「かわらけ」は、使われた時代により形や作り方に違いがあり、館の形成を知る上で重要な手がかりになります。近年の発掘調査では、室町時代にさかのぼる「かわらけ」が、同時代の整地層からも多量に出土し、「大友氏館跡」と呼ばれるこの地が、宗麟の時代から100年以上も前に館として使用されていたことがわかりました。

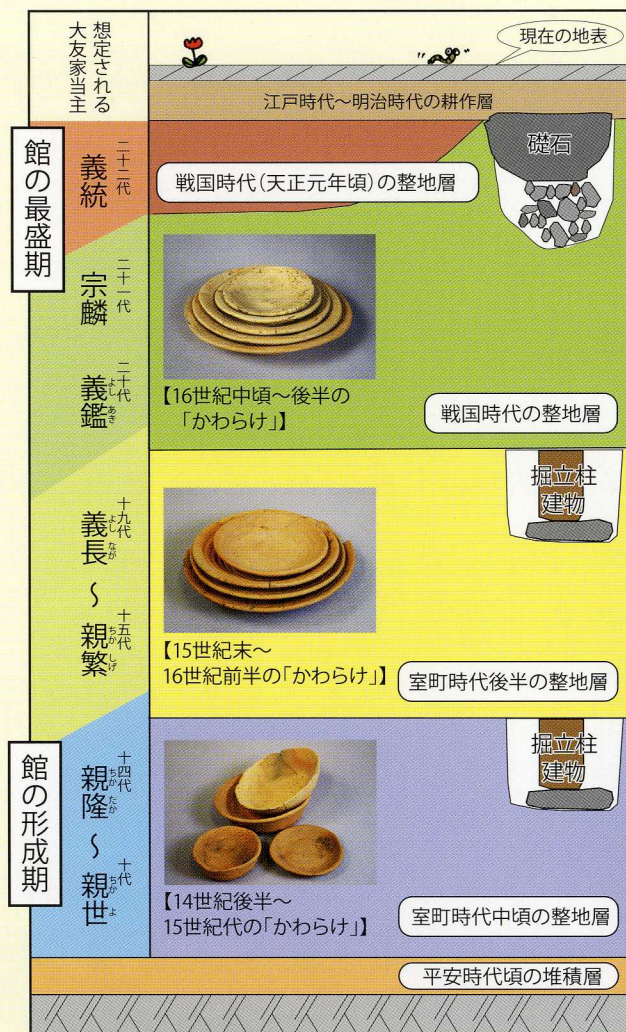
館の繁栄

最盛期の館では溝と溝に挟まれ、粘土と砂を交互に積んだ遺構がめぐっていたことがわかりました。これは文書に記された「土圃廻塀」とよばれた館を囲む施設であると考えられています。「土圃廻塀」の築造を命じた文書は、1573年(天正元)に集中して出されており、溝から出土した遺物の年代とも矛盾がないことから、最盛期の館は1573年頃に築造されたといえます。一辺約200m四方の広大な屋敷は、東南部に大きな池を伴う庭園があり、中央部には大型の礎石建物(主殿)が造営され、足利将軍邸に似た壮麗な景観であったことがわかりました。



大友義統書状(大友義統が税所越中守へ宛てた文書)

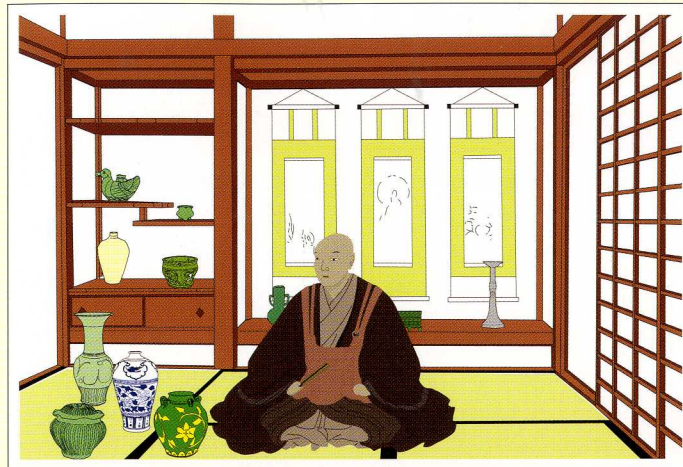
文書の「東之築地」と記載されている部分(赤線囲み)は、近年の研究成果より、大友館の築地を指すと考えられています。東側の築地は、府内古図に描かれた姿(右の写真)であったかもしれません。



大友館中心部の土層の堆積模式図



「府内古図」に描かれた大友館(上が西) [個人蔵]



大友宗麟と館の一堂(想像図)



逸品!!

出土した青磁器台(左)と、当館が所蔵する同種の国内伝世品(右)

また、青磁の器台(壺などを載せる台)や青花・青磁・青白磁の壺など、中国産の優品が多数発見されています。こうした唐物の中には、日本の鎌倉時代にあたる中国の宋・元の時代の焼物もあり、当時の骨董品にあたるものです。これらの器は、おもに床の間などの室内を「飾る」ために収集されたもので、足利将軍家の好んだ唐物を至上とする価値観が戦国大名に受け継がれたことを表しています。館より出土した唐物たちは、まさに大友家の富や権威を象徴するステータスシンボル(威信財)であったといえます。

館で行われた行事

大友義統によって記された「當家年中作法日記」には、大友家に伝わる様々な年中行事が記録されています。日記によれば、1月29日に「大おもて節」とよばれる年中行事が、館の内部で執り行われていたことが記されています。この行事では大友家による新年の儀式と、参列した多くの家臣へのねぎらいをかねた饗宴が行われ、莫大な数の「かわらけ」が、酒を酌み交わす盃などとして使用されていたようです。「かわらけ」は、清浄さが重要視され、一度使用したものは二度とは使用されずに捨てられました。館跡からは、これらの行事に使用した「かわらけ」を多量に捨てた穴がたくさん見つかっています。

館のおわり

館は、1586年(天正14)に島津氏の北上にともない府内の町とともに戦火に巻き込まれ、この年の12月に焼亡しました。その後、府内の町は復興しますが館は再建されず、敷地の一部は町屋として利用されました。繁栄を誇った大友氏は、1593年(文禄2)豊臣秀吉の命により豊後国から除国され、府内城を中心とする新たな城下町の建設にともない、大友氏によってつくられた府内の町は終りを告げます。新しい時代の足音が響く頃、大友館も400余年の眠りにつきました。

表紙紹介

発掘調査が進む大友館跡の全景写真です。最盛期の館は一辺約200m四方の規模をもち、内部では庭園や礎石建物などがみつかっています。オレンジ色の実線は発掘調査でわかった道路(破線は推定部分)を示し、四角の枠でかこまれた部分は、これまでに行われた調査地点を示しています。館の東側(現在の国道10号線部分)には、幅11mの大規模な南北道路がつくられており、道の東側にそって町屋が立ち並んでいました。



「かわらけ」を多量に捨てた穴

酒宴の盃などに使われた「かわらけ」が多量に捨てられています。「かわらけ」に交じって白く見えるのは玉砂利で、館の建物の周囲を美しく飾っていたと考えられます。



大友館